

研究ノート

モーパッサン『テリエ館』における食と宗教

橋本由紀子^{※1}Food and Religion in Maupassant's *La Maison Tellier*Yukiko HASHIMOTO^{※1}

ABSTRACT

Published in 1881, Guy de Maupassant's *La Maison Tellier* is the tale of a brothel in Normandy, its clientele and its workers. Madame Tellier, the madam of the house, takes her company to her brother's village to witness the first communion of her little niece. What is striking in the tale is the admixture of bodily and religious appetites as the characters move from the brothel in Fécamp to the small village church and back again. Like many of his contemporaries—most obviously Balzac, Flaubert and Zola—Maupassant shows how bodily appetites, often via scenes of eating and drinking, reveal certain aspects in the lives of the characters. The pleasure the plump prostitute takes in eating is apposite. But rather than such appetites being aloof from religious states, Maupassant shows their entwinement. Communion, after all, is the consecration of the gifts of bread and wine and their transformation into the body and blood of Christ. This paper then shows how Maupassant in *La Maison Tellier* relates food to religion and how his characters' behavior around food and eating habits leads to religious states.

十九世紀フランスの美食家ブリア＝サヴァランはこう記している：「造物主はわれわれに生きるがために食べることを強いるかわりに、食欲によってわれわれをそこに誘い、美味によってわれわれをささえ、快楽によってわれわれに報いているのだ。」¹ 美食の国、食いしん坊の国というフランスのイメージは、フランス革命を契機として、食という娯楽の民衆への解放に伴い、十九世紀を通じて形成された。

ギ・ド・モーパッサンの作品には食事の場面が多い。生まれ育ったノルマンディー地方の風俗が多く描かれ、しばしば食事が重要な場面となっている。まず思い浮かべられるのは、処女作の中編『脂肪の塊』(1880) であるだろう。主人公の娼婦エリザベットが、馬車の中で次々と食べ物を広げてそれを同行者たちにふるまう場面、逆に最後の場面で食べ物を持たない彼女を前に、彼らが無慈悲に食事をとるといふ対立的な場面は、物語の中で特に重要な位置付

けにある。この作品では、極めて肉感的な肢体を有するエリザベット自身が食べ物に譬えられ、やがて娼婦という身分からドイツ兵に「食べられる」という食の構図も見える。この点についてはモーパッサン自身が、食べ物と女性、すなわち食欲と性欲を同列に置き、「すばらしい料理は美しい女性と同じ立ち位置にある。女性と食事は自分にとって、二つの情熱だ。」² と述べている。

食を文学作品に登場させたのは、十九世紀前半の社会を『人間喜劇』(1842-) 執筆を通して描き出そうとしたバルザックとされ³、世紀後半にはやはりフランス社会を緻密に写そうとする自然主義作家ゾラが、『パリの胃袋』(1873) という、パリの中央市場を舞台にありとあらゆる食べ物を陳列した作品を刊行している。モーパッサンの師であるフロベールの小説にも、食事の場面が多く描かれる⁴。こうしてこの世紀の多くの文学作品において、人物描写や風

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 准教授 Associate Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

景描写が、しばしば飲食物の描写、あるいはその比喩によってなされるようになる。

本稿ではモーパッサンの作品の中でも、すでに多くの研究者に論じられ、その食の場面が明らかに重要な役割を果たしている『脂肪の塊』ではなく、その翌年に出された『テリエ館』(1881)における食の問題を検討する。前作に比べて食事の場面は少ないが、同じく娼婦が扱われており、さらにそこには宗教の問題も絡んでくるからだ。『テリエ館』の中核をなしているのは、聖体拝領という、キリストの体を「食べる」儀式である。この儀式と食、娼婦の物語は、どのような繋がりを持つのだろうか。

1. 「熱烈で孤独なグルマン」

食と宗教の関わりは深く、「共に人間の根源的な二つの営み」⁵とされる。古来、飲食物は神あるいは神々からの賜りものであり、捧げものともなってきた。キリスト教において、パンとぶどう酒がキリストの体と血を意味することは言うまでもなく、福音書にもパンや魚、ぶどうの挿話が多く見出せる。食事の前後に捧げる神への感謝の祈り、重要な儀式が行われる時の祝いの食卓も、宗教と食との関係性を示すものであるだろう。『テリエ館』においても、初聖体の儀式の後に用意される各家庭での宴が、大切な決まりごとのひとつとして描かれる。その一方で、食に対する欲求は、戒めの対象でもある。キリスト教の「七つの大罪」のひとつに「大食」が数えられることから明らかなように、過剰な欲望は罪深いものと見なされる。同様に、七つの罪には「淫欲」も含まれる。食欲も肉欲も共に人間の自然な欲求であり、とりわけモーパッサンにおいては、先に見たように両者が同列に置かれ、人間の赤裸々な姿を描くために必要不可欠な要素となっている。

モーパッサンはパリでの事務仕事に日々嫌悪感を示しており、週末にノルマンディーの田舎で川遊びをすることを何よりも楽しみにしていた。書簡には、「僕はパーン(牧神)なのです。頭から足先までそうなのです。何ヶ月もの間、野山を駆け巡り、夜は一晚中水辺で、昼はずっと森かぶどう畑の中で、ひとり灼熱の太陽のもとで過ごすのです。」と記され、対立する世界として、「都会の人間界の全てが自分を窒息させる」と述べられている⁶。モーパッサンは自然や本能を愛した。そこでは牧神というギリシャ神話の神のように、旺盛な食欲と女性を好む心が強調される。この作家は同じ書簡で、「僕は自分の身体の法、つまり動物と同じ法に従う」とし、生来の女性

への嗜好を強調する。そしてその後が続いて、「僕は熱烈なグルマンです。食べるために食べる、孤独なグルマンです。そうして健康的な食べ物がもたらす甘美な興奮を味わうのです。」と記す。この「グルマン」という言葉が、十九世紀フランスの食文化においては重要な意味を持つ。

冒頭で述べたように、フランスが美食の国というイメージを持つようになったのは、フランス革命後、十九世紀に入ってからだった。サヴァランの『味覚の生理学(邦題では「美味礼讃」)』の出版が一八二六年だったことから、この世紀のフランス文化における食の位置付けの向上が見て取れる。量よりも風味の繊細さの重視、洗練された食事への探求は十八世紀を通じて発展していったが⁷、とりわけ革命後に「ガストロノミー(gastronomie)」つまり「美食学」という語が積極的に用いられるようになり、料理が研究対象となる。「グルマン(gourmand)」という単語も、十九世紀に一躍その存在感を増す。日本では「グルメ(gourmet 美食家)」という語はよく知られているが、グルマンという語の認知度はそれほど高くない。辞書では、グルメが質的なこだわりを示す語であるのに対し、グルマンはむしろ量に対する嗜好を意味する「食いしん坊」と説明される。ただし十九世紀フランスにおいて、グルマンはより広い、むしろグルメに近い意味で使われていた。グルマンの定義については、サヴァランより前の一九〇三年から初の料理評論誌『美食家年鑑』を刊行し始めた、グリモ・ド・ラ・レニエールに関する橋本周子氏の研究書に詳しい⁸。この言葉は十八世紀まで、動物的で下品な、飽食の悪徳を示していた。ところが十九世紀になると、「グルマンであること」から派生した「グルマンディーズ(gourmandise)」すなわち「美食」という語が、肯定的な概念として捉えられるようになる。それでもグルマンという語は、「美味しいものを食べるのが好きな人」「食事を共有できる社交的な人」という肯定的な側面を持ちつつも悪徳という否定的なニュアンスも孕んでいたため、橋本氏は翻訳がほぼ不可能な言葉だと指摘する。総じてグルマンは、フランス文化の独特かつ重要な特質を示す言葉と見なされる。

モーパッサンは自らを「熱烈で孤独なグルマン」と称しているが、この言葉はまずこうした十九世紀フランスの食文化の文脈で捉えられるべきだろう。一方で「孤独」という言葉が示唆するように、そこには社交界からは距離を置いて自然と戯れる牧神のイメージが加えられる。こうしたモーパッサンの嗜

好は、冷たく厳しい色彩を持つ『脂肪の塊』よりも、陽気な娼婦たちとノルマンディーの自然が生き生きと描かれる『テリエ館』に、より色濃く表れていると思われる。この作品に見られる食事は、田舎の大気の中でなされ、人々の和やかな交流の場となっている。また聖体拝領についても、ミサにおける食事の共有、すなわちキリストにおいて皆がひとつになることが、その本質として捉えられる。

2. 『テリエ館』における食事の場面

『テリエ館』は、聖体拝領の儀式に娼館の一行が出かける物語である。ノルマンディー地方のフェカンにあるテリエ館には、経営者のマダムのもとで五人の女たちが働いている。ある日、姪の初聖体の知らせを受けたマダムは、奔放な女たちを監督下から外す不安もあり、全員で同じノルマンディーの田舎町ヴィルヴィルに向かうことにする。同じ地方でも他県であり、自動車での移動を伴う旅は、田舎暮らしの人々には一大イベントとなる。小さな村ヴィルヴィルでは遠いフェカンの娼館は全く知られておらず、農民たちの目には、煌びやかな彼女たちは立派なご婦人たちとなり、村長も敬意を表して教会で自分の席を譲る。

この中編小説は、フェカン、ヴィルヴィル、フェカンという移動に伴い三部構成となっており、食事の場面は四つある。最初はフェカン郊外のヴァルモン川の溪谷に、日常生活の息抜きに出かけるピクニック、二つ目は聖体拝領の儀式に参加するためにマダムの弟の家に着いてご馳走になる昼食、三つ目は儀式の後の宴、四つ目はフェカンに戻った夜の盛大な一行帰還祝いである。この物語に見える食事は、いずれも日常生活習慣の範疇を超え出た、特別な喜びの場として描かれる。

まず、最初のピクニックの場面を見てみると、そこには普段は夜の仕事部屋や男と酒に満ちた広間に籠っている娼婦たちの、解放感あふれる喜びが発散されている。

とはいえ、時々平日には、自分の一座の分隊を引き連れて、貸し馬車でピクニックに出かける。そしてヴァルモン溪谷を流れている小川の岸辺に赴き、草の上で遊び戯れるのだった。それは、寄宿舎を抜け出した女学生の遠足であり、大はしゃぎの駆けっこであり、子供っぽい遊戯であり、大気に酔いしれた籠の鳥の歓喜だった。草の上に座って、ハムやソーセージ (de la

charcuterie) を食べ、林檎酒 (du cidre) を飲み、そして日が暮れてくると家路につく。身体は気持ちよく疲れ、心は穏やかな感動に浸っている⁹。

ここには水辺、草、大気といった、ノルマンディーの広々とした田舎の風景に、女たちの声が響き渡る光景が広がっている。そこに見えるのが、ハムやソーセージ (原文ではcharcuterie「豚肉製品類」)、そして林檎酒 (シードルcidre、サイダーの語源とされる) である。ピクニックのメインイベントが食事であるのは言うまでもないだろう。ここに記された肉製品と酒は、いずれも地域の特産品であり、人々の日常生活に密接に結びついた定番食材といえる。特に林檎の発泡酒シードルは、モーパッサンの作品に頻出する農民の飲み物であり、ノルマンディーの人々が送っている田舎生活ののどかさを醸し出す。やがてテリエ館一行が向かう村でも、シードルは同様の空気を生み出すだろう。テリエ館も娼館ではあるが、決していかがわしいイメージを持たず、むしろ日常生活に溶け込んだ場であることが、いくつかの「健全な生活」を示す語によって強調される。物語も、「人々は毎晩十一時頃になると、カフェにでも行くように、ぶらりとそこに出かけるのだった。」(傍点論者)¹⁰という一文から始まる。都会に根強い娼婦への偏見はこの片田舎には存在しないとされ、娼館の経営者は女学校の寄宿舎の監督に瞥えられる。このピクニックの場面でも、娼婦たちの様子が寄宿舎、女学生、遠足という、健やかな少女たちの生活を示す言葉に瞥えられる。ここに描かれるシードルとソーセージは、そうした日常生活を象徴すると共に、一般的には非日常世界に属する娼婦たちにとって、日の当たる場所での特別な楽しみを彩る役割を担っている。

田舎の大気の中での食事の場面は、旅先でも描かれる。そのひとつがマダムの弟の家、指物屋の仕事部屋でとる昼食の場面である。自動車と馬車に揺られて疲労し空腹のところ、次々と家庭料理がふるまわれる。

おいしいオムレツ (une bonne omelette)、次に強い上等の林檎酒 (de bon cidre piquant) をかけた、焼いた豚の腸詰 (une andouille grillée) が出て、一同は活気付いた。リヴェは乾杯をしようとグラスを手に持っていたが、妻は給仕をしたり料理を作ったり皿を運んだり下げたりしながら、一人ひとりの耳に口を寄せては「お好きな

だけ召し上がってね」と囁くのだった。壁に立てかけた板や片隅に高く掃き寄せられた木屑からは、鉋をかけた木材の匂い、指物屋特有の臭気、あの肺の底までしみ込むような脂っぽい息吹が発散していた¹¹。

ここにもやはりノルマンディーの田舎家庭らしいご馳走が見える。「おいしい」「よい」bonという形容詞が付いたオムレツに続き、舌を指す(piquant)新鮮なシードルにも同じくbonという語が使われている。この場面のシードルは、こうした形容詞に加え、調味料としての役割を見せることで、手の込んだご馳走の雰囲気を感じ立てる。そのシードルをかけて Grillした腸詰アンドウイユ(Andouille)は、豚の大腸に豚の腸や胃、喉肉やばら肉を詰めたもので、見た目にも大きく豪勢な、やはりこの地方特産のご馳走である。原文ではこれらが「皆に快活さ(la gaieté)をもたらした」とあるが、このgaietéという名詞には「ほろ酔い機嫌」という意味もある。飲み物にも料理にも用いられるシードルの泡は、後述するシャンパンとは異なる親しさと安心感をもたらす。さらにここでは、その活気に木材から立ち上る香りが混じり合うことで午後一時の暑い外気を感じさせ、高揚感が倍増されている。

この二つの場面では、いずれも味覚のみならず、聴覚や嗅覚に訴える描写により、心地よい屋外の空気と活気が醸し出されている。しかしこの作品に記される食べ物は、食べられる食事だけではなく、食べる者にも見出せる。

3. 肉と肉体

食べる者として、本稿では「あばずれのローザ(Rosa la Rosse)」に注目したい。先の二つの場面に共通して出てきた、豚の腸詰、ソーセージが、この娼婦の身体を表すものともなっているからだ。ここで、モーパッサンが同列に並べる「食」と「女」の、肉体の方がクローズアップできる。ローザは、テリエ館で働く女の中で最も特徴的な肉体を持つ。登場の際から、「丸々と太った、全体が腹だけでできているような女で(une petite boule de chair tout en ventre)、それに極小の脚が付いている。彼女がお喋りをやめるのは物を食べるためであり、物を食べるのをやめるのは、お喋りをするためである。」¹²という説明がなされ、「所構わず爆発するけたたましい笑い声」と併せて強い猥雑性を与えられている。「丸々と太った女」の原文は、「肉の小さなボール」である。この表

現は、この作品の前年に出された『脂肪の塊(Boule de Suif)』、すなわち娼婦エリザベットのあだ名「脂肪のボール」を思い起こさせずにはおかない。

「ソーセージ」が現れるのは、汽車の中で、彼女たちの素性に気付いた行商人の男が、靴下留めを口実に女たちの足を出させる場面である。ここでローザのスカートの下から出てくるのが、特徴的なソーセージに譬えられる脚だった。彼女の「蹠のない、まるまると太った、不格好な足(原文では「足」ではなく「ものchose」と記され、人間というより物体としての肉体性が強調される)」は、同僚のラファエルの言葉として、「本物の〈脚のソーセージ〉(un vrai « boudin de jambe »)」と説明される。日本語では「ソーセージ」と訳されるが、原文のboudin「ブーダン」は豚の血と脂身で作られた腸詰め、匂い消しや香り付けにニンニクや玉ねぎ、ハーブなどが混ぜ込まれる、いわゆるブラッドソーセージである。この語は太い指や、太った人そのものも示す。ソーセージという比喩は、やはり丸々と太った「脂肪の塊」エリザベットにも用いられている¹³。肉体の一部が食べ物に譬えられることで、そこには一際生々しい印象が生み出され、その肉体が実際に「食べられる対象」であることが示唆される。さらにそれが、ニンニクや玉ねぎといった匂いの強い食材を含んだ、豚の血と脂の練り物という非常に癖のある食材であることから、娼婦が持つ肉のイメージが強く訴えられるものとなる。

このようにローザは極めて強烈な肉体を有しているが、それだけに物語の中で常に重要な役割を与えられ、その都度強い印象を残す。そのひとつが聖性との繋がりである。娼婦が一般の人々よりも敬虔で純情というイメージは、一種のステレオタイプとなっている。確かにモーパッサンは娼婦を、ブルジョワ社会における、例外的に人間らしい野性と感性を保有した存在として描いていると考えられる。しかしここには何より、ブルジョワとこの時代の宗教に対する、辛辣な皮肉がある。

娼婦と聖性との緊密な関係は目新しいものではない。たとえばマグダラのマリアは「改悛した罪深い女」あるいは「娼婦」の代名詞ともされ、神の国に迎えられる者と見なされる。「罪の女」マグダラのマリアの名は、二十世紀に入ってからはその解釈が変わったものの¹⁴、福音書の複数の挿話の組み合わせからカトリック教会の中で広がり、そのイメージは根強い。十九世紀フランスにおいても、娼婦たちは男たちの性的欲求のはげ口として社会秩序の保持の

ために社会の最下層で生きることを認められていたが、その性的にも社会的にも最も弱い立場に置かれた女性たちに、たとえその真偽が定かではないとしても、しばしば真摯な信仰が見出されていた¹⁵。ただし、モーパッサンが『テリエ館』において娼婦たちの姿に描いた宗教性は、同じく弱者として女中の信仰を描いたフロベールの『純な心』(1877)のフェリシテとも、やはり女中だが最終的には性的にも堕ちていくゴンクール兄弟の『ジェルミニ・ラセルトゥー』(1865)に見られる神父への恋慕とも異なり、辛辣でありながらも明るい光を放っている。

その要因のひとつは、この物語の重要な要素である「娼婦と聖体拝領を受ける娘」との接触が、徹底して滑稽に、しかし素朴な信仰心を喚起するものとして描かれているからといえるだろう。そこで大きな役割を果たすのが、やはり食べ物イメージであり、食事の場面であると考えられる。

4. 太った娼婦の体、聖体を授かる少女の体

ブラッドソーセージに譬えられる肉体を持つ娼婦と、聖体拝領という、キリストの体を口から戴く少女とは、徹底して対立的に描かれており、けたたましい騒ぎと沈黙、けばけばしい衣装と「よく泡立てたクリームのように真っ白な (neigeux semblable à de la crème fouettée)」¹⁶服が対比される。このクリームも地方の産物で、それが「雪のように真っ白 (neigeux)」と表現されることで、少女の体を覆う純白を強調する。女たちが接吻と抱擁の雨を降らせる間、「この全身に信仰がしみこんだ少女は、罪の赦しを受けたため、外部の汚れがつかなくなった身でもあるように、おとなしく、息をこらして、されるがままになっていた」(傍点論者)¹⁷と記され、初聖体の儀式の前日、ひとり寝の寂しさに眠れない少女とローザが共に眠る場面では、「こうして夜が明けるまで、この聖体を受ける少女 (la communauté) は自分の額を、淫売婦 (la prostituée) の乳房にじかに当てながら眠ったのだった。」¹⁸と、やはり清浄な体と不浄な体との接触が強調される。

ところが聖体を戴く儀式の場面で、この対比が崩れ去る。モーパッサンの作品にしばしば見える十九世紀フランスの階級的・宗教的イデオロギーの逆転が、この場面にも描かれる。祭式の最中に自分の少女時代を思い出したローザの発作的な嗚咽が、全ての村人たちに伝染し、「飛火が枯野を焼き払っていくように、ローザとその同輩の涙が全会衆を虜にし」、祭司をもって「これは神だ。神が我々の間におられ

る。お姿を現されたのだ」¹⁹と感極まらせる。そして、これこそまことの秘蹟、イエス・キリストが初めてこの幼い子たちの肉体に宿ろうとしている時に、精霊があなた方を捕えた、と言わしめる。ここで、少女の体を雪のように覆っていた「泡立てたクリームのような純白の」衣装と、ローザの記憶に蘇る「自分の体をすっぽり包んでいた白いドレス (原文では *toute noyée en sa robe blanche* 「白い衣装にすっかり溺れていた」)²⁰とが融合する。そして、失われた「白い」清浄さを懐かしむローザの涙と、「無垢な時代の区切りを意味する」²¹初聖体の儀式とが融合し、祭司のことばによって「キリストの体の拝受」と「精霊の交わり」とが、同時に少女とローザの体の中で行われたことが示唆される。この場面には、集団ヒステリーによる狂乱が奇蹟として捉えられるという、冷笑的な視点も見いだせる。しかし、ローザから始まる娼婦たちの嗚咽、会衆の同調、子供たちの「神聖な興奮」(*une fièvre divine*)、祭司の感動へと、波状的に連なる感情の動きも、決して形式的ではない、聖性の感得として捉えられるのではないだろうか。そもそも信仰とは、神的なものとの繋がりを個々が感じ取ることに発する。決して制度的身分的なものではない。この作品では、こうしてそれぞれ赤黒いソーセージと白いクリームに譬えられる娼婦と少女を連ならせることで、形骸化した宗教への皮肉と共に、ひとつの素朴な信仰のかたちが提示されているとはいえないだろうか。ローザは『脂肪の塊』のエリザベットとは異なり、積極的に正義や公平さを貫こうとするわけではなく (エリザベットには聖母マリアのイメージまで与えられる)、思い出にむせび泣いただけで、熱心な信仰心が記されるわけでもない。しかしその素朴で率直な感性が、一種の聖性に結び付けられていると考えられる。

こうした魂の高揚の後に訪れるのが、疲労と空腹感である。最後の福音書の朗読を待つことなく、村人たちは食事の支度のために教会を後にする。儀式の完遂よりも食欲の優先、ここにもキリスト教会への皮肉が見える。しかし信仰のかたちとはそもそも、福音書のカナの結婚式の例を²²挙げるまでもなく、楽しく食べ、飲むことで幸福感を共有し、神に感謝を捧げるところに発するのではなかつたらうか。

往來に面して開け放された戸口からは、村中の楽しい空気がいっぱいに入ってきていた。至るところで宴の最中である。どの窓からも晴れ着を着こんだ会食者たちの姿が見える。楽しそ

うに飲み食いしている家々からは、賑やかな笑い声が漏れてくる。農民たちはシャツ一枚で生の林檎酒 (du cidre pur) をグラスいっぱい注いで飲んでる。(中略)

午後の陽の熱を浴びながら、時折、老いたやせ馬にひかれて、腰かけ付き馬車が村をガタゴトと通っていった。そして馬を御す仕事着の男は、目の前に広げられた数々のご馳走 (ripaille) を見て羨望のまなざしを向けるのだった。

指物師の家では、午前の感動の名残か、賑やかなうちにもどこか控えめな空気があった。リヴェだけが羽目を外して飲み騒いでいた²³。

先の二つの食事の快活な空気をさらに広げたような、このような場面にこそ『テリエ館』の明るい色彩の源があると思われる。ここでもやはりシードルが宴の中心にある。グラスの底から立ち上る泡の刺激は、食事がもたらす生命感を膨らませる。そして、通りがかりの農民が見る「ご馳走」は、彼やこの辺りの人が使っているだろう“ripaille”(「大宴会」「山ほどのご馳走」という話し言葉で記され、仲間うちでの集まりの気安さや盛り上がりを表す。こうした食事の賑やかさがあるからこそ、一方で普段はご馳走を前に大はしゃぎするだろう女たちの「控えめな」余韻が、とりわけ印象的なものとなる²⁴。

5. 「お祭り」の終焉

ここまではシードルが飲み物の主役をはっていたが、第三部、フェカンに戻ってテリエ館が再開された夜には、ふんだんにシャンパンがあげられる。そしてテリエ館の再開を待ち構えていた客と女たちが入り乱れ、夜中まで歌やダンスが繰り上げられる。最後は、勘定を「普段の四割引きのシャンパンぶんのみ」にしたマダムが晴れやかに発する、「毎日、お祭りというわけにはいきませんよ。」²⁵という一言で物語の幕が下りる。「お祭り (la fête)」という語は「盛大に祝われる宗教的儀式」という意味を第一義に持つ。シードルが農民の経済的な日常飲料であるのに対し、高価なシャンパンは特別な祝い事の時に飲まれる、非日常の飲み物である²⁶。テリエ館は、男たちが日常生活の雑務から離れて、ただ楽しむことを楽しめる場所であるが、この夜は男たちだけではなく、女たちにとっても、非日常の喜びのクライマックスを意味するひと時だった。それがシャンパンの泡の氾濫によって表される。

ジョルジョ・アガンベンは「事物や人を共通の使

用から除外して、分離された領域に移すものが宗教であると定義できる²⁷と云う。ここから宗教儀式とは、日常の世界から、非日常の世界へと移動することとして捉えられる。テリエ館の女たちにとっては、娼婦という日常の使用から超えて、再び元の使用に戻ってくるという移動自体が、一連の儀式だったといえるのではないか。だからこそ、非日常世界の最後の段階としての帰還祝いにあげられた、非日常を象徴するシャンパンの泡が、最後にマダムが発する、物語の最後に置かれた、「お祭り」という単語に収斂される。

モーパッサンは、自分にはもはや感情も詩情も持たない人間というものに幻滅しきっていて、宗教に至っては人の人間性を貶めるだけの、愚劣の最たるものと記している²⁸。しかし『テリエ館』という作品は、この作家が愛したノルマンディーの美しい情景と感情豊かな人々、そして和やかに囲まれる食事で彩られている。そこ描かれる宗教性は、十九世紀のブルジョワ社会への辛辣な皮肉を示すと共に、娼婦への偏見を全く持たない田舎の人々の素朴な信仰心の明るさも照らし出している。食の問題も性の問題も、革命後にその性質を大きく変えた宗教の問題²⁹も、十九世紀フランスの大きな関心事とであった。この中編小説にはそれらの問題がちりばめられていた。

この作家は六つの長編と三百を超す中小編を記しており、ノルマンディーだけではなく、パリの市民生活や普仏戦争を題材にした作品、幻想物語など、様々な世界を描き出している。そこに食や宗教の問題がどのように展開するのか、それは稿を改めて考察したい。

¹ ブリア＝サヴァラン『美味礼讃』上巻、関根秀雄・戸部松美訳、岩波文庫、1967年、196頁。サヴァランは法律家であったが、食通として有名だった。(Jean-Anthelme Brillat-Savarin, *Physiologie du goût*, Flammarion, 2009.)

² Guy de Maupassant, *Correspondances 2*, Edition établie par Jacques Suffel, Edito-Service S.A., p.129.

³ アンカ・ミルシュタイン『バルザックと19世紀パリの食卓』塩谷祐人訳、白水社、2013年。

⁴ ジャン＝ピエール・リシャルは「フロベールの小説では、人々は実によく食べる。料理が山のように盛り上がり、周囲には食欲がますますかきたてられていくというあの食卓の描写が実によく現れる。」と記す (Jean-Pierre Richard, *Littérature et*

sentation, *Stendhal Flaubert*, Seuil, 1954, p.137.)。また『ボヴァリー夫人』に描かれた夫婦の食事の場面で、食卓から立ち上るエンマのどうしようもない倦怠感を説くアウエルバッハの分析は名高い(E.アウエルバッハ『ミメシス—ヨーロッパ文学における現実描写(下)』篠田一士・川村二郎訳、筑摩書房、1967年、238~241頁。Erich Auerbach, *mimésis, la représentation de la réalité dans la littérature occidentale*, Gallimard, 1968.)。

⁵ 南直人(編)『宗教と食』〈食の文化フォーラム32〉、ドメス出版、2014年、9頁。

⁶ *Correspondance 2*, op.cit., p.6.

⁷ 中世から革命までの食文化の歴史については、バーバラ・ウィートンが著した『味覚の歴史、フランスの食文化—中世から革命まで』辻美樹訳、大修館書店、1991年に詳しい。

⁸ 橋本周子『美食家の誕生—グリモと〈食〉のフランス革命』名古屋大学出版会、2014年。

⁹ Maupassant, *La maison Tellier, Une partie de campagne*, chronologie, introduction, bibliographie, notes et documents par Pierre Cogny, GF-Flammarion, 1980, p.42. 翻訳は青柳瑞穂氏の訳を適宜参照しつつ拙訳とした。(『脂肪の塊・テリエ館』新潮文庫、1967年改版。)

¹⁰ *Ibid.*, p.41.

¹¹ *Ibid.*, pp.53-54. このように一皿ずつ出す食事の供し方は十九世紀半ば以降とされる。それまでは一気に食事を食卓に並べていた。前者が「セルヴィス・ア・ラ・リュス(ロシア風)」、後者が「セルヴィス・ア・ラ・フランセーズ」と称される。(『味覚の歴史』前掲書、362頁。)

¹² *Ibid.*, p.44.

¹³ 「小柄な体はどこもふっくらと脂がのっけていて、指も丸々と太って節々だけくびれているため、短いソーセージを数珠つなぎにしたようだ(pareil à des chapelet de courtes saucisses)。」(Maupassant, *Boule de suif, La maison Tellier*, Gallimard[folio], 1973, pp.36-37.) このソーセージ saucisse は細いまだ加熱調理していないもので、それに対して saucisson と呼ばれるソーセージは太く、サラミのように乾燥・熟成させている。

¹⁴ The Sinner 「sinner: (宗教的な) 罪びと」から「改悛した罪の女」を意味する単語が、マグダラのマリアの異名とされ、性的な不品行を犯した者、娼婦を意味する。ルカによる福音書に記された「罪深い女」もマグダラのマリアとされる:「この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の

人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持ってきて、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。」(「ルカによる福音書」7:37-38、『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1988年、(新)117頁。)ただし現在ではマグダラのマリアが娼婦だったことは否定されており、マルタの妹のベタニアのマリアとの同一視も真偽が定かではない。

¹⁵ アラン・コルバン「娼婦」、ジャン＝ポール・アロン『路地裏の女性史—九世紀フランス女性の栄光と悲惨』片岡幸彦訳所収、新評論、1984年、64頁。(Alain Corbin, *Les Filles de Noce : Misere sexuelle et prostitution 19^e et 20^e siècles*, dans *Misérable et Glorieuse, la Femme du 19^e siècle*, sous la direction de Jean-Paul Aron, Librairie Aethème Fayard, 1980.)

¹⁶ *La maison Tellier*, op.cit., p.57.

¹⁷ *Ibid.*, p.55.

¹⁸ *Ibid.*, p.56.

¹⁹ *Ibid.*, p.60.

²⁰ *Ibid.*, p.59.

²¹ Introduction écrite par Pierre Cogny, *La maison Tellier*, op.cit., p.28.

²² ガリラヤのカナの地で行われた結婚式で、イエスは水をぶどう酒に変えるという最初の奇跡を行った。「ヨハネによる福音書」2:1~12参照。

²³ *La maison Tellier*, op.cit., p.62.

²⁴ ただしこの穏やかな食事の後は、再び指物師リヴェの家の二階で乱痴気騒ぎが起こる。

²⁵ *La maison Tellier*, op.cit., p.70.

²⁶ シャンパンの生産と需要が伸びたのは、瓶の破裂を避ける技術が確立された一八三〇年頃以降で、爆発的に広まったのは十九世紀後半だった。とりわけこの時期、シャンパンは催淫剤と考えられ、高級娼婦の飲み物ともされた。この物語にも含意されているかもしれないが、栓から噴き出る泡により性的な暗喩を持つ飲み物ともされる。

²⁷ ジョルジョ・アガンベン「澆神礼賛」、『澆神』堤康徳・上村忠男訳、月曜社、2005年、106頁。

²⁸ *Correspondance 2*, op.cit., p.6.

²⁹ 王制の崩壊と共にカトリック教会もその地位を危うくしたが、十九世紀においては世間の秩序維持という役割を担うことによってその存在感を保っていた。そのため形骸化した儀式や信仰心、世俗的な聖職者が、しばしば文学者たちの揶揄的と

なる。またこの世紀に至って初めてキリスト教を客観的な研究対象として諸宗教の中に位置付ける

ことが可能になり、神学とは異なる宗教学という学問が誕生する。